

基 調 講 演

テーマ

「河川環境とそこに生息する動植物 ～出水により変化する川の環境～」

講師 杉本 利英 氏



雨が多い富山では洪水も起きる

富山県は年間平均降水量が2,245ミリで、日本(平均1,690ミリ)では雨の多いエリアです。世界(平均807ミリ)と比べても非常に雨が多く、「水の王国・富山」と言われます。しかし雨が多いと、洪水も起きます。洪水で川はどう変化するのでしょうか。

流されてまた生える植物

川ではいつも水をかぶる所に湿地を好むヤナギタテや、倒れても復活するツルヨシ。ちょっと高台の砂地にオギやヨシ。川原にはカワラヨモギ。めったに水をかぶらない所に高木のハリエンジュなどが生えています。川の中の草木は洪水になると流されてしまいますが、根や茎が残ればすぐに生えてきます。また洪水によって栄養分豊富な土砂が川原にたまると木が生えやすくなり、数年で大きな木が育ちます。



昆虫は川の環境とともに生きる

昆虫を見てみましょう。地球上には約76万種の昆虫がいて、そのうち3万種が日本にいます。種によって口の形が決まっています。限られたものしか食べられず、遠くへ移動もできないので、川にすむ昆虫は木や草、砂れき地など川の環境を住み分けて生きています。たとえばカワラバッタは川原の色と保護色で、洪水で砂れき地が広がると有利ですが、洪水が起きず草が生えると敵の鳥に見つかりやすくなって絶滅の恐れもあります。



魚の休息場や避難場が川にある

次に魚です。川には浅くて流れが速く石が多い瀬(せ)があり、藻類を食べにアユや水生昆虫などが来て、水生昆虫を食べにウグイなども来て、多くの魚が集まります。深く流れがゆるい淵(ふち)は魚の休息場です。また本川からちよつと離れた所にワンドやタマリという小さな池や湾入部があります。流れが遅く水深が安定しプランクトンや水草が多いので、産卵したり稚魚が育ち、洪水のときは魚の避難場所にもなります。

川原でしか生活できない鳥たち

川原でしか生活できない鳥たちもいます。砂れき地には川原の石のような卵を産むコチドリやイソシギなどが、崖地にはカワセミがすんでいます。河川外でも生活するキジは、川原の草むらに卵を産みます。洪水で砂れき地が増えるとイソシギなどが増え、一方、ヨシ原が流されるとオオヨシキリなどは減ってしまいます。川にすむ鳥たちは、砂れき地やヨシ原、崖地などがなくなると絶滅してしまいます。



普通の生き物がすむ環境を大切に

もちろん貴重種の動物を守ることは大切です。でも、いつも川原に普通にいる昆虫や魚、鳥などはもっと重要です。普通の生き物が川にすめないと、私たち人間もすめなくなる可能性があります。ですから雨が降って洪水になり、川原ができ、また草が生える…そんな当たり前の環境こそ大切に守りたいですね。



杉本 利英

国土交通省 北陸地方整備局 利賀ダム工事事務所 副所長

プロフィール

1978年 建設省入省
神通川水系砂防、信濃川、千曲川、庄川、小矢部川を中心としてダム・砂防・河川・海岸の調査計画を主に担当。
主な著者として【信濃川の生い立ちと防災】や企画・編集として【River Ecosystem 河川生態系の基礎知識】【千曲川・犀川の自然】【信濃川・越後平野の地形と地質】等がある。

